

社会を変えるターニング ポイントとなるような 開発に携わりたい

ハウス食品株式会社

高橋 佐和子さん TAKAHASHI SAWAKO

1995 年 東京生まれ。2014 年東京理科大学理学部第二部化学科入学、
2018 年東京理科大学大学院理学研究科化学専攻入学。佐々木健夫研究
室配属。2020 年修了。同年、ハウス食品株式会社に就職。

ハウス食品といえば、「バーモントカレー」に代表されるカレー、
「うまかっちゃん」などの袋麺、「プリンミクス」や「フルーチェ」といったデザート類、
「とんがりコーン」などのスナック菓子、そのほかレトルト食品や調味料に至るまで、誰でも一度は名前を聞いたり、食べたことがあるのではないだろうか。

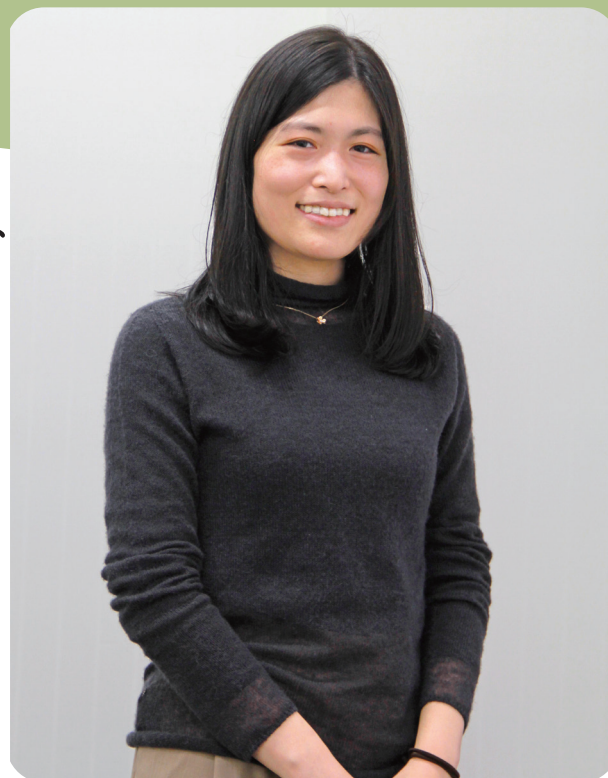
今回のぶらり人発見でご登場いただくのは、ハウス食品株式会社に開発職として勤務する高橋佐和子さん。長い黒髪とふんわりした笑顔が印象的な高橋さんから、おとなしくて優しいような人柄が伝わってくる。しかし話を聞いているうちに、外見からは想像できない強さを秘めた人間像が浮かびあがってきた。



2歳の頃。食べるのが好きな子だった。



3歳の頃。料理のお手伝いも。作っているのはやっぱりカレー。



崖っぷちでもあきらめず行動すれば 道は開けると実感

「食べることが好き。なかでもカレーが大好きだったんです」と、高橋さんは入社の際の動機を語る。見た目の印象どおり屈託のないピュアな動機である。

もともとモノづくりが好きで、就職するならメーカーだと早くから決めていた。東京理科大学の理学部第二部化学科に進学し、大学院では液晶の研究をしていた。「研究分野は食品という分野からは大きくかけ離れていますが、自分のやりたいことをつきつめたら、やっぱり食品なのかなと思ったのです」

就活の際に自己分析をしていくと、小さい頃から食べることが好きだったこと、人生の分岐点には必ず食が関係していたことを思い出した。「たとえば入試などの大事な時には、必ず母がお弁当に海苔で『がんばってね』とメッセージを書いてくれたものです。食には人に気持ちを伝える力があると感じていました」

食品関連メーカーのインターンシップに参加したり、会社説明会に訪れた中で、親身になって話を聞いてくれた人事担当者や朗らかで温かい社員たちに好感を持ち、ハウス食品が強く印象に残った。

ハウス食品グループのグループメッセージは「食でつなぐ、人と笑顔を」。これを見たとき、「まさにそのとおりだ」と共感したという。「大学時代、カレー屋



3歳の頃、父と。両親は幼い頃から高橋さんのやりたいことを尊重してくれた。



弟が二人。3人姉弟の一番上なので自然としっかり者に。



つるびか団子づくりに夢中になっていた幼稚園時代。

さんでアルバイトをしていたのですが、おいしいものを食べて人が笑顔になる姿や、常連さんとの何気ないやりとりにとっても心が温かくなったものです。食には人を元気にしたり人と人をつなぐ力もあるんです」

しかし、食品メーカーは就活生に人気が高く、競争倍率は高かった。高橋さんは3次面接まで進んだところで敗退。ここで高橋さんは自分でも思いがけない行動に出る。「ほかにも数社の選考がまだ残っていましたが、どうしても諦められなくて、採用担当の方に『2次募集のときにもう1回挑戦してもいいですか?』とメールを送ったのです」

数日後、採用担当者から連絡があった。なんと高橋さんは内定の通知を獲得したのである。

「崖っぷちに立ってもアクションを起こすことが大事だと身をもって学んだできごとでした。あのメールを送っていなかったら今の私はないかもしれません」

優しそうな外見とはうらはらの強い一面を見たエピソードだ。

子どもの頃から強い自己主張を内に秘めた努力家だった

幼い頃は、おとなしくて活発からは程遠い子どもだったという。家で工作をしたり絵を描いたり“ものづくり”をして過ごすのが好きだった。「黙々と作業をするのが好きで、幼稚園の頃はびかびかの泥だんごをひたすら作っていましたね」と振り返る。

小学校の時にはお菓子作りに夢中になった。バレンタインデーには友達同士でチョコレート交換をするのが流行っていたが、「みんなが作るのは、チョコレートを溶かして形を作りその上にチョコペンで絵を描いたもの。人と同じなのは嫌だと思い、私はチョコレートタルトを作りました」

内向的ながら、内側には強い自己主張を秘めた子どもだったことがうかがえる。

小学校の高学年になると、より様々な考え方や価値観を持つ人との関わりを持ちたいという理由から、自分から中学受験をすることを選んだ。

「受験勉強は大変だったのですが、問題が解けた時の喜びを知ったのはこの時です。その達成感を味わいたい一心で、夜の12時くらいまでこつこつ勉強をしていました」

これは大学受験生ではなく小学生の話なのだから驚きだ。努力が実り、共立女子中学高等学校に合格。

「共学もいいかなと思っていましたが、結果的に女子校を選んで良かったと思っています。私は積極的に友達を作るタイプではありませんが、そんな私でも自然と友達ができ、その中の数人とは今でもお付き合いがあります。一生の友達ができたのは女子校だったからだと思います」

入学当初の成績はふるわず、目立たない生徒だったという高橋さん。しかし、担任の先生の一言が転機となる。「目立たなかった私をちゃんと見ていてくれて、『あなたは努力家だからその力を伸ばしてね』と声をかけてくれたのが忘れられません。自分でも意識していなかった長所に気づかせてくれたのがその先生でした。自分を認めてくれる人がいるということが励みになり、成績も伸びていきました」

運動にはあまり縁のなかった高橋さんだが、「せっかくだから青春的なものを味わいたいと思って」体育会系の部活に入ることにした。「見学に行ったら楽しそうだったのと、運動神経がなくても努力である程度カバーできそう、という理由でダンスを選びました」

ゆるい部活かと思っていたら、高校は地区大会入賞の常連校。「放課後だけでなく、朝練、昼練もありました。家でも密かに練習するくらい打ち込みました。



小学校時の学芸会。右側が高橋さん。
「おとなしかった」と言いつつ、しっかり主役。

小学校の運動会で友人たちと。
左端が高橋さん。



中学校のとき、ダンス選手権大会に出場。
前列右から2番目が高橋さん。

振付も生徒だけで考えてチームみんなで作り上げるところが魅力。ここでも“ものづくり”の楽しさを感じていました。やり遂げた時の喜びを分かち合えるのも良かったですね」

学校は文武両道を標榜しているので、勉強もがんばらなければならなかった。「夜は部活でくたびれて9時半には寝てしまうので、朝2時半に起きて勉強していました」と高橋さん。しかも私大志望の生徒が多い中、高橋さんは国立大志望。試験科目数が多く勉強は大変だった。「でも、高い目標を立ててがんばるのは好きだったので、それほど苦にはなりませんでした」と話す。筋金入りの努力家なのである。

第二部の学生だからこそ得られたこと

大学の選択には迷った。「早くから理科系と決めていましたが、色々なことに興味がありすぎて、学部を絞るのが難しかったですね。結局、将来どの分野に行っても基礎として役立つ化学に進もうと決めました」

部活は高校3年の11月までやっていたので、受験勉強時間が圧倒的に足りず、国立大学は不合格。東京理科大学は私大の第1志望だったが、試験対策が間に合わず、高橋さんは、理学部第二部の化学科に入学する。昼間はアルバイトをして夕方4時から夜9時まで大学で授業を受ける。実験の授業がある日は帰宅が夜10時を回ることもしばしばあった。「最初はちょっと気持ちが沈みましたが、すぐにこの生活パターンも悪くないなと思いました。特に良かったのは、二部には年齢層も境遇も様々な人たちが通っていたことです。多様な価値観を持つ人たちと人間関係を作っていくのはとても貴重な体験でした」

二部でも一部と同様、関門科目があり試験で合格点を取れなければ留年してしまう。「みんなで24時間営業のハンバーガー屋に集まって一緒に勉強しました。一致団結して乗り越えたことが嬉しかったですね」

研究の基礎、プレゼン、タイムマネジメント、すべて佐々木研究室で学んだ

4年生から修士課程にかけては佐々木建夫先生の研究室に所属。「佐々木研究室では液晶を研究していました。液体でもなく固体でもない液晶という物質の奥深さに興味を持ちました」。佐々木研究室では研究だけでなく、毎年の液晶学会で発表することも求められた。「私は発表が苦手な事実を淡々と述べることでできず、先生によく『すごい研究なのだからもっと自信をもって伝えなさい』と指導されたものです。今でも得意ではありませんが、人の印象に残るように言い回しを考えることが習慣になりました」

佐々木研究室では、他の研究室のようなコアタイムはなく、そのおかげでタイムマネジメント力が養われた。「自分で計画を立てて予定通りにプロジェクトを進める訓練になりました。これは社会人になってからも役立ちました」

オンオフを切り替えて研究とプライベートを両立することも研究室で学んだことだ。

「研究室の中で飲み会をしたり、夏は研究室のメンバーと旅行をしたり、研究室対抗のスポーツ大会もあって、青春な日々でしたね」と回想する。

学部生から大学院生時代は充実していて思い出は尽きることがない。長期休暇は、友達と国内や海外旅行もした。「達成感があったのは、青春18きっぷを買って島根から四国を周遊した一人旅ですね。限られた日数でいかに効率よく行きたいところを回るか、旅のプランを立てるのが好きで得意でした」

東京オリンピックの頃は、外国人に交通案内をするボランティアにも参加した。動機は「指導して下さった、ベトナム出身の助教の先生が流暢に英語を話すのを見て、私も将来外国人と仕事をするようになったとき英語を流暢に話せたらいいなと思った」から。成果はというと「やはりアウトプットすると会話



高校2年の修学旅行にて。一番左が高橋さん



大学の卒業旅行で研究室の仲間たちと。
左から2番目が高橋さん。



コロナ禍の2020年、大学院の修了式にて。

力が身につきますね。かなり上達したと思います」

今も、英語力をキープするために、オンライン英会話で勉強を継続中だ。

自分しかできないことを見つけて 存在感を示したい

高橋さんが就活を始めたのは修士1年の終わりから。化学メーカーや医療機器メーカーなども検討したが、結局食品メーカーに絞られ、念願がかなってハウス食品に入社したことは最初に述べたとおりだ。

入社当初は「StewP シリーズ」などペースト状の調味料シリーズの商品開発にたずさわった。入社4年目の今年から工場設備の更新業務に従事している。

「当社の工場には、できあがった製品を容器に詰める充填機のほか、様々な機械があります。経年変化で劣化した機械を最新の機械に入れ替えるにあたって、費用対効果を勘案しながら最適な機械を選定するまでを私がリーダーとして取りまとめています」

以前の商品開発の仕事の時は、工場や企画部などやり取りする人が限られていたが、今の業務は、社外の機械メーカー、社内の設備担当者、現場のオペレーターなど、様々な分野の人たちと話し合いながら機種を決めていく。「いろいろな分野や立場の人の価値観を知ること視野が広がることに面白さを感じています。また、後輩を指導する立場になり、教えることの楽しさもあります。後輩が立派に成長する姿を見たときは、やりがいを感じますね」

高橋さんがすごいのは、仕事を楽しみつつも、「会社の中で自分は何で特化すべきかを常に模索している」ということだ。

「食について詳しい人は既にたくさんいるので、それ以外で自分が存在感を示せて、しかも楽しく取り組めることは何かと考えてきましたが、CAE (Computer Aided Engineering) を使った伝熱解析の分野に活路を見出しています。社内には詳しい人が少ないので、この分野で第一人者となって会社に貢献したいです」

たとえば、容器に充填されたカレーやペースト調味料が外からの熱によってどのくらい温度変化するのか。「今は1日ばかりで実機を使って実験していますがCAEを使えば、数時間でシミュレーションできます。実現すれば生産性向上に貢献できると思います」

ふんわりした笑顔とはうらはらの強い野心、計画性に驚かされる。

「今後、結婚や出産などのライフイベントもあるかもしれませんが、仕事と家庭を両立していきたい。今の職場には、子育てしながら研究職と両立している女性が多く心強い」と話す高橋さん。キャリア面では

「何か1つでも、社会を変えるターニングポイントとなるような開発に携わりたい。また、現在は海外との接点がないので今後海外とも関わる機会があればチャレンジしたいですね」

「人と違うことをしたい」と、チョコレートタルトを作っていた小さな子どもの面影が見えた気がした。

取材を終えて

終始ふわっとした笑顔だった高橋さん。気負いなく、さらっと言うことがすごい。「朝2時半に起きて勉強!」「その上ダンスの自主練!」「第一人者になりたい!」と、いちいち驚く筆者でありました。ターニングポイントとなる新開発、お待ちしております!

(フリーライター/石井栄子)